

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第10回:「仏教の常識は世間の非常識なのか」

仏教教団は、釈尊と弟子たちによって始まりました。

最初期から、階級社会の世間のルール・習慣から解脱して修行者たちは、修行道場を制定しました。修行道場では出世間のルール(律)習慣(戒)を用いるために結界を制定しました。結界内を境内といい、今でも使われている言葉です。

現在の資本主義の競争社会の世間では、自分と他人、或いは物事を比較考量したり、利害得失や効率化を考えて、日々を送っています。こうした比較考量、利害得失、効率非効率の判断、分別のもとになっているのは、好き嫌いの「感情」や「欲望」です。いわば、煩悩を出発点とした世間になっています。

出来れば自分の好きなやり方で、自分の好きな仲間と効率的に他者より優位に立って、物事を運びたいというのは、一般の世間では、常識的なことです。いわば煩悩が「世間の常識」になっているのです。

これに対して、一般の世間を離れた出世間(シュツケン)である僧堂では、煩悩から離れようとする修行が生活の基本です。

本来、人がもっている「仏心 仏性」を僧堂生活の基本にしようとしているのです。

毎日の生活の中で「ものの見方、考え方」を世間の常識に囚われず、自他の対立をなくそう、相手の心にどうしたらなりきって集団の生活をできるかを叱られながら励むことを教えられます。

一般の世間では、「私」と「あなた」の対立、「私」と「モノ」の対立から、もの事を見、考えます。しかし僧堂の出世間では、「私」も「あなた」も、同じ「仏性」をもつ、そこから出発します。

それゆえ目の前の「私」は、「あなた」や「モノ」になりきろうとして、手間を惜しみません。まず、掃除であれば、僧堂の廊下では、廊下になりきれと雑巾がけをします。トイレの掃除であれば、便器がどのように清潔になりたいかを考えながら掃除をします。

対象になりきろうとして、それに打ち込むことを教えられます。

最初は、私も戸惑いました。僧堂の生活を本の知識としては知っていましたが、本の知識や事前の思い込みとは実際の僧堂生活は別物でした。

入門の試練で5日ほど周りの人たちとは離れて食事やトイレ以外は坐禅だけの時間があります。

一人だけで坐っていますと考えることは自分の過去現在未来のことだけになってきます。

少しずつ世間での自分というものが剥がれ落ちていきます。

世間での地位、名前、技能などが全く役に立たず、自分を形作っていたものが剥がれ落ちてしまうのです。

何も持っていない、何ものでもない自分に気が付きました。

私にとって、僧堂生活である意味一番苦しかった記憶があります。

入門時は、私の基本は煩悩主体の脳でしたから、煩悩脳の私からすれば、何も持っていないこと、自分が何ものでもないことが恐怖でした。

僧堂では、世間での一切の経験則を捨てようとしています。

名にこだわらず、ただ目の前のもの事に打ち込むように教え励まされるのです。

何も持っていない私からすれば、坐禅に打ち込むことができること、掃除に我武者羅になることなどが活力になりました。

それでも、初めの一年間は、物事の見方考え方の脳の経路の付け替えで焼き切れそうになった記憶があります。

今思うのは、一人ではできなかったことも修行道場の仲間がいたからできたことです。

そうした修行によって悟りを開けば、世間で起こることは全くその人に関係なく、またその覚った人は、世間の常識を拒否して、世間から離れて例えば山中に住することが出来、またそれが悟りの世界、出世間のすべてなのでしょう。

禅の世界では、「野狐禅」という言葉があります。

「無門関」の「百丈野狐」という公案から来ている言葉ですが、山田無文老師の提唱された「百丈野狐」の公案で考えてみたいと思います。

「百丈野狐」は「昔百丈山のお寺の住職であった人（前百丈）が、百丈禅師の前に現われて、彼が昔立派な悟りを開いた人は因果に落ちないかを問われたとき『不落因果：因果に落ちない』と答えてその後五百生もの間、野狐(やこ)の身に落とされた・・・『ついてはどうか野狐からもとの人間に戻す一転語を』と言われ、百丈和尚が『不昧因果』と応えた・・・」と続くものです。

この公案の提唱において、山田無文老師は、上掲の『不落因果』を指して「因果とは歴史的現実の世界を言う・・・」とし、「世界がどんなに乱れていようと、社会がどんなに荒んでいようと・・・禅者はそういうことに関わってはいけない、しかも自分は煩惱則菩提で何をしても構わぬ、不落因果だと悟りすますならば、それは独善的観念論に過ぎない。こういう禅者を呼んで野狐禅と言うのである。」と禅者が陥りやすい謬りをさとしています。また、続けて「憂うべきは断見の禅病」とも述べています。「断見」とは、元々の意味は、ひとが死ねば、心身とも断絶して何も残らない、と言う因果全振りの考え方をいいます。

ここでは、因果：歴史的現実を否定し、世間を断絶する考え方を指すのでしょう。(下欄注) また

老師は、さらに進んで「歴史的世界にとらわれぬ心境の自由さ」と中道を説かれています。歴史的現実に向き合いながらも、「とらわれない、こだわらない、しがみつかない」ことの大切さを教えられているのでしょう。

自分に引き寄せて考えますと、竺園寺の山中に籠もらず、街頭に根を持ち、こうして坐禅会を催し、その場でこうして話をすることが、町でも役割を持ち働くこと、そうした独善に陥らない禅者の在り方の模索であると思っています。

仏教だけでもない、禅だけでもない、煩惱すら心の一部であると認めて、苦を受け入れながら釈尊の見ていたものを垣間見たいと足掻く生き方を皆さんと考えて生きてみたいと思います。

注： 反対に「常見」と言う言葉があります。「常見」は、常に変わらない自我・靈魂があって、それは不滅のものとする考え方です。これら当時のインドにおける「断見」「常見」の考え方に対して、お釈迦様は、死後については、「無記」—何も語っていません。

以上

蛇足) 今回は、雑誌「禅文化」の古川周賢老師の一文にあった「修行道場では、修行僧たちは『僧堂の常識は世間の非常識だぞ』」という言葉を題材にして、お話をお願いすることにしましたものです。

今回および以前のお話でも、引用紹介頂いた山田無文老師は、妙心寺派管長、花園大学学長や禅文化研究所初代所長を歴任され、1988年に88歳で亡くなりましたが、また修行僧を引率して、戦時、南太平洋で亡くなられ遺骨収集されないままの人たちの慰霊を続けられ、まさに歴史的現実：因果を撥無（否定）せず向き合われましたが、数多くの著書によって世間の人を、今も教え、励まされています。(ネットからNHKアーカイブ「あの人に会いたい」でお人なりが紹介されています。放送時間約3分、ご参考まで)(文責 中村彰利)

